

## 胸張りて行け 面あげよ —— 折井一の教育実践と教育観 ——

宮 坂 広 作  
Kousaku MIYASAKA

### はじめに—テーマとモチーフ

本稿は、戦後に新学制が発足してからまもなく、新制の工業高校の教員となり、のちにその校長を勤めたひとりの人物をとりあげ、彼の教育実践と教育観について叙述しようとするものである。

ほんらいなら、彼の教育実践に絞って詳叙したいのであるが、それは資料の制約があつて困難である。<sup>1)</sup>しかし、彼は自分の実践について断片的ながら書き遺しているし、そもそも彼の教育観は、実践の上に形成されたものである。教育学関係の書物を読んだような形跡はない。彼の教育観は、実践・経験からの帰納であり、それ故に確かなりアリティをもっている。

彼の教育観は、折井一という一箇の人間の、人間性の表白である。彼の日ごろの行動、生き方の結晶である。観念や理屈ではなく、生きている人間の生活の中から生まれ出たことばである。説得のための教説ではなく、自己の反省であり、希望であり、記録である。

彼の文章は、きわめて正直であり、率直である。彼は、旧制高校の卒業生であるが、高校生時代に仲間たちのスローガンであつた「フランクであれ」の精神を、終生もちつづけていたようにみえる。彼は一高生活を懐しみ、その寄宿寮や剣道部で与えられたものに感謝していたが、そのパーソナリティはまさに旧制高校生的であつた。

しかし、彼は旧制高校生の理想主義的志向を色濃くもっていたが、エリートイズムには汚染されていなかった。一高をビリから二番で卒業し、帝国大学への入学にあたって二年も浪人したという経歴が幸いして、彼は選良意識や愚民蔑視意識から解放されていた。こうした学業上の失敗を語るときも、彼にはこだわりがない。

彼の人柄や思想が、彼の人生から形成されたことは勿論だが、家庭においては父親、学校生活では先輩や友人からの影響がつよかつたように思われる。彼自身、小学校から大学までに教わった先生の中で、「特に指導をうけ、特に影響をうけた先生はない」と記している。<sup>2)</sup>しかし、そのあとで、上のように記したことは自分の思い上がりで、いろいろな面で影響も受け、世話にもなっていると、反省の辞を補っている。人間形成にあたって、本人が自覚す

ることなしに、多くの人間からの影響を受けるのは言うまでもないことである。

さて、筆者が本稿を記述しようと思った理由は、筆者自身ひとりの教員として、教育実践上多くの悩みと苦勞を抱えており、それらを克服するための英知を、すぐれた先人たちから得たいと熱望するが故である。筆者は折井と同郷であり、折井とは大学同窓である。また、折井とはいっぺんだけだが会ったことがあり、そのさいの彼の言説にいたく感銘をおぼえたことを記憶している。<sup>3)</sup> 再訪を約しながら果たせず、筆者が東大を退官して諏訪に帰住したときには、すでに逝去されたあとであり、またしても「風樹の嘆」をしたたか味わうことになった。<sup>4)</sup> 本稿で折井の教育観を紹介するのは、この敬仰すべき先人にたいするレクイエムであり、筆者の悔悟である。

なお、幼稚園教諭の免許状発行にかかわって、学生の修得すべき教職課目の一部が改訂され、新たに「教職に関する研究」が課されることになった。本学ではこの科目を「教師論」とし、筆者が担当することになった。本稿は筆者の教師・教職に関する研究の一端である。本稿が学生たちにとって、教職のあり方について学習するさいの資料になることを願っている。良い教員になるためには、まず良い学生であらねばならない。本稿が、学生諸君の、よき学生、よき人間たらしとする志向をはぐくむことに少しでも貢献するならば、筆者の喜びこれに過ぎるものはない。

## 1 折井一の生涯と実績

折井は、1910（明治43）年3月10日、長野県の上諏訪で生まれた。家はいわゆる「大和士族」であり、父親は職業軍人であった。父、衡は、諏訪中学の第二回（1896年）入学生で、同期生67名中、上諏訪出身は9名、上級学校進学者は25名（東大4名、早大6名など）であった。衡は、同級生の中でただひとり軍関係の学校（陸軍士官学校）に進んでいる。一年上級の一期生には岩波茂雄、同期生には永田稔・樋口長衛・野明敏治・丸茂（両角）藤平などがおり、一級下の学年には茅野儀太郎（簫々）・藤森良蔵がいた。いわゆる諏中草創期で、校風未だ混沌の時代であり、学校運営への生徒の参加をめぐる校長と生徒が激しく対立していた時期であった。第四期生が五年生のころには、生徒の自治権が大幅に認められ、諏中は黎明期の黄金時代を迎え、中島喜久平・藤原咲平・小平権一などと共に、衡の弟、亮が文武両道に長けたリーダーとして活躍した。

衡は職業軍人としては珍しく柔軟な思考をする人で、リベラルな雰囲気をもった人だったようである。一は、この父を懐かしむ文章をいくつか書いているが、一が大学入試に二度失敗しても、叱責しなかったというし、また、高校一年生の一の手淫をたしなめたときも、ごく軟らかい口調で論理的な説得をしたという。<sup>5)</sup> 1941年、後備役から退役になろうとしたとき、「満州の土」たらしと志して退役延期を願い出、撫順の填薬所長となったが、部下が満

人に暴力を振るうのを厳禁し、所長専属の通訳である若い満人をかわいがり、慕われた。1930年に、中佐で後備役になった。陸士の同級生は中将・少将になっているので、一は父親のことを「ほんくら軍人」だと思っていたというのが、出世にあくせくすることのない、世渡りのあまりうまくない人間だったのであろう。

一は、父の勤務地である仙台で中学校（仙台一中）を卒え、一高の理科に進学した。四年修了時に二高を受験し、友人数人は合格したが彼は落ちた。あとで10点不足のための不合格と知らされたが、模擬試験のさいにできなかった問題をそのままにしておいたところ、それと類似の問題が実際に入試に出て解けず、そのことが敗因だと認識すると、一はくやしくてたまらず、しきりに後悔したという回想を書いている。<sup>6)</sup>

二高に落ちたおかげで一高に入れた訳であるが、一高での勉学生活はあまり成果をあげたとはいえない。数学の「こちこちの文」や、習ってもいない微積分で説明する物理の授業に悩まされ、すっかり物理嫌い・数学嫌いになってしまった。それを癒してくれる先生も友人もいなかったが、たまたま寺田寅彦の本に出会い、「頭の悪い人が科学者になるんだよ」とか、「数学は科学の言葉だから君だってわかるんだよ」と語りかけられ、「涙の出る程うれしかった」と書いている。<sup>7)</sup>

勉強ができなかったのは、剣道部の練習に打ち込みすぎたからである。一高の撃剣部は、勝敗にこだわらず、剣の道は人間修養の道だと教える、品位の高い運動部であったが、反面猛練習で聞こえていた。朝 1 時間・午後 2 時間・夜1時間の計 4 時間の練習をやり、しまいには選手の小便が血で赤くなるほどであった。<sup>8)</sup> 折井が数学で赤点を取ったとき、上級生が彼をつれて数学の教授を訪ね、不成績は剣道修行を熱心にやったせいなので、なんとか勘弁していただきたいとビッテ（懇願）してくれた、という。<sup>9)</sup>

高校3年間はなんとか無事に過ごし、卒業できたが、大学へは 2 年間足踏みした。父親も母親も、それについては文句を言わなかったので、折井も追いつめられることなく、一高の同級生——府立一中出身で、一高の卒業成績は下から 3 番、つまり折井の一席上——とマージャンをしきりにやって、浪人生活を楽しんだ。しかし、時局は満州事変勃発前後の、風雲急を告げる時代であった。

大学は工学部の火薬学科であり、軍事技術の性格の濃いところである。ここの在学中の師弟関係は「水のような」交わりであったが、牧助教授の有機化学には大いに意欲を燃やされた。<sup>10)</sup> 1933年の夏休み、大学の同級生 2 人と共に陸軍火薬製造所で 3 週間の実習をおこない、規律のきびしさに悩まされたが、他面で所長の安藤中佐の人間性にふれえた。<sup>11)</sup> 大学卒業後、折井は陸軍科学研究所雇員として就職し、火薬ロケットの研究に従事した。

折井は敗戦間近の六月に陸軍の技術将校（少佐）として、大阪城内の中部軍司令部兵器部付きとなった。米軍の本土上陸に備えて、ゲリラ戦用の火薬の備蓄に当たり、兵庫県の生野銀

山や四国の大歩危小歩危に出張し、また陸上に落ちた磁気機雷の火薬の抜き取り方法を兵隊に指導するなどの仕事をおこなった。<sup>12)</sup> この間、単身赴任で別居した妻に、任務のことはおろか居所さえも告げられぬ音信不通の状態にあったという。

敗戦となり、折井は「大阪城の淀君」の気分を味わいつつ、これから何をやっていくべきかを思案した。その際、軍の研究所に入って8年たった頃、いつも行く紀伊国屋で買った富塚清著『技術教育』のことが思い起こされ、青少年の科学技術の教育に当たろうと決心した。<sup>13)</sup> 日本が負けたのは日本人の科学技術が劣っていたためであるから、教師になって科学技術の振興に尽くそうと考えたのである。

折井は諏訪に帰り、教師になろうと思ったが、技術将校とはいえ現役軍人ということで教職適格審査に引っかかり、「世の中が馬鹿らしくなって何もする気」がせず、時計の修繕のようなアルバイトで糊口したのち、1947年に日本オルガノ商会に勤め、1950年によく長野工業高校の教諭になれた。1年間の単身赴任のあと、世話する人があって諏訪実業高校に移り、4年後に岡谷工業高校の教員（化学科長）となった。2年後の1957年、飯田工業高校長となって、6年後池田工業高校長、さらに2年後松本工業高校長となり、4年間その職にあって1969年に退職した。退職後は岡谷工高の非常勤講師を7年間やり、77年に完全引退した。彼の教員生活27年間のうち、平教員が7年間、校長が12年間、非常勤教員が8年間である。中年で教育界に参入した教員としての経歴は、まあ順調だったといえるであろう。彼の学歴・実力・人格あるいは縁故が、彼のキャリア形成にどんな割合でかわっていたかはわからないが、長野県の当時の教育界は折井のような人物を受け入れる余裕をもっていたのである。

教員としての彼の実績については、まず平教員として生徒たちにどのような指導をしたかという点であるが、彼は誠実に教育実践に当たり、生徒たちひとりひとり、とくに問題を起こした生徒に温かい配慮をし、時には遠慮なく生徒の反省を促している。生徒たちから支持されてもいる。授業方法が特にすぐれていたとは思われないが、その人間性は生徒から信頼されていたように思われる。このことこそが、教師として最高の条件である。

校長としての彼の実績は、施設・設備の貧弱だった飯田工高の充実（近代化）に努め、農業高校から転換された池田工高では、創設期の混乱・困難を克服すべく苦勞した。伝統校としての松本工業では、「中堅技術教育」から「技能教育」へとレベル・ダウンされつつあった工業高校教育に対して、創造性の開発を主張し、生徒に「技術や」としての矜りをもたせようと努力した。学業であれ、運動であれ、「一つの事に熱中し、ひたむきに追求していく」ことを生徒たちに訴えた。<sup>14)</sup> 活き作りにされた鯉が、息絶えるまであきらめず、やることがあるが故に生に執着する姿を詩にして、柔道部員たちに「精進」、つまり一意専心の精神を教えた。

彼の学校運営は、どの程度の成功を収めたのであろうか。彼の書き遺したものから、その片鱗を窺うことはできる。しかし、それを正確に評価しようとすれば、当然あらゆるエビデンスを求めて丹念な資料収集をしなければならない。残念ながら、いま筆者に与えられている条件では、そうした作業は許されない。ここでは彼の意図や願望を紹介するにとどめざるをえない。それらが注目され、学ばれるべき価値を十分もっている、と考えるからである。

## 2 工業高校（生）の問題状況

戦後、新学制が実施され、かつての中等学校は新制高校となった。それまでの中等教育は、中学校・高等女学校・実業学校というふうに分立していて、あたかも別種の学校の観があった。このうち中学校のみが、高校・帝大へと進学していくエリート・コースの入り口（「登竜門」）だとみなされていた。筆者が1944年に諏訪中学に入ったときの入学式で、校長が「諸子は日本の将来の指導者となるべき立場であるから、よく自重し、勉学と身体鍛錬に励まなければならない」といった趣旨の講話をしたと記憶している。また、戦時中、どこかの地方で各中学校の生徒が集まる公式行事があったさい、もっとも伝統ある中学校の生徒たちが、行進の先頭に立つことを主張して争いになったという話も聞いている。

六・三制によって、すべて新制高校となり、形式的平等は一応達成された。しかし、男女共学制や総合制高校が多かった関西地方とは違って、長野県の場合は学校の統廃合がおこなわれずに、旧制の分別ごとに高校に移行し、各高校は従来の伝統をそのまま背負うことになった。普通高校は進学校であり、実業高校は袋小路（ターミナル）の学校だとみなされた。同じ普通高校でも、大学への進学成績によって格差が生まれ、入学の難易度によって一流校から何流校までのレッテルが貼られるようになった。

実業高校間にも格差が云々されるようになり、工・商・農といった序列が取り沙汰されるようになった。高校進学率が90%を越えるようになると、こうした学校間格差はさらにひどくなり、ついには「底辺校」・「教育困難校」などと言われるような学校が生まれるに至った。六・三制発足時よりもっとあとになるほど実業高校の教育は困難になっていった。折井の在職中、すでにこの問題は避けて通れないものになっていたが、折井はこの問題に真正面から取り組んだ。

折井が諏訪実業の教員だったころ、つぎのような事件があった。<sup>15)</sup> 校内クラスマッチで優勝した商学科（男子）3年のB組と、被服科（女子）1年のB組が、B組同士ということで祝勝合同コンパをやったのを、無届けだったというので3年B組の担任教師が怒り、「被服科のようなくずとコンパをやるとは何事か」と言った。これを耳に入れて、当然被服科の生徒は怒った。怒ってはいるが訳は話そうとしない生徒たちを高島公園の葉桜の下草原に連れ出した折井は、生徒たちの口を開かせ、次のように話してなだめた。

「被服科だからくずだなんということはない。商業科でも卒業して会社の金をちょろまかすような人間のくずがいる。被服科だから、商業科だから、人間の価値がきまるのではない。人間としてやるべきことをやることによって、人間の価値がきまるのだ。能力の違いはあるだろう。自分のもっている力を、十分に出せばいいじゃないか。」

これは説得のためのレトリックではない。折井は商業科の担任に抗議し、彼の失言に対し、心ない言葉であるとして、無届けがいけないのであればそれをつけばいいし、他の組とコンパをやるのがいけなければそれを言えばよいと批判している。そして、「その先生は、一応あやまったが、生徒ならずとも、担任の私が忘れる事の出来ない言葉だ」と、差別意識に対する怒りを表白している。

筆者もまた学生への話の中で、大学の序列などにこだわるべきでなく、いわゆる一流大学の卒業生でも反社会的行動で道徳的な批判を浴びたり、破廉恥な行為で犯罪の被疑者となったりする者がある事実をあげ、学歴の如何を問わず人間として精一杯誠実に生きることの尊さを説くことがある。それはまさしく筆者の信念であり、筆者は学歴主義批判のつよいスタンスを有している。

しかし、学生たちが、「自分は一流大学卒をえらいとも羨ましいとは思わない。そういう人たちの中にも、人間的にみておかしい人があるようなので」と語ったり書いたりするのに接すると、必ずしもその意見に同調しえないのである。非難され、批判されるような人は、一流大学卒の一部にすぎず、そうした人間が一部存在するということだけで、一流大学に入学することが否定される訳ではない。またさらに、ではそのように言う学生たちが、自分は人間的に見てまともなのか、あるいは人間的であろうと努力しているのかといえ、必ずしもそうではないのである。上記のような一流大学生論は、下手をすれば酸っぱい葡萄の言説や、優越者にたいする妬みやひがみとしてのSheide-freude（毀傷の喜び）の表現になりかねないことを恐れるのである。

そもそも実社会では、生産性あるいは作業の能率によって働く者が評価されている。出来高が問題になるのであって、精一杯努力したか否かではない。つまり、教育的評価と経済的（経営的）評価では、原理も手法も違うのである。生産性の如何によって評価されることはやむをえないのであるから、それは甘受することにして、なおかつ人間としての矜りのために精一杯努力することの意義を学生・生徒たちに納得させることは、きわめて難しい。努力してもしょせんかなわない、無理だという諦めや放棄の感情は、繰り返しての挫折体験から定着したものであり、それを克服することは容易でないからである。

工業高校の生徒の実態はどうか。折井の記述によれば、家庭や学校の影響で、勉強もしないし、本を読むことも少ない。<sup>16)</sup> しかし、カリキュラムでは基礎科目と専門科目の両方をやらねばならず、生徒の学習すべき内容は多大である。工業高校機械科のある生徒は、折井に

つぎのような述懐をした、という。<sup>17)</sup> 授業の時はみな内職ばかりしており、3人寄って話をすれば女の子のこと、校長と話しているとあいつは校長にごますつていられると言われる。授業はつまらないし、勉強もする気がしない。学校がいやになった……。

しかも、工業高校出に対する企業の評価は、あまり高くない。折井が会った、あるアルミ製造会社の工場長は、工業高校出がホワイトカラーに憧れて設計・製図・中央管理室などで働きたがること、黒い煙の出る電解工場をいやがること、新入者に現場の作業をやらせると初めのうちはみな本にばかり頼っていることなどを指摘した。<sup>18)</sup>

折井は生徒のための就職運動で出かけた大阪の会社で、当社は大卒と中卒とがあれば十分で、工業高校出は世話ばかり焼けて中途半端だとけなされ、ある大学の教授からは、工業高校出は5年たつと役に立たなくなる、と言われた。折井は、こうした評価を全面的に肯定はせぬとしつつも、工業高校出身者がたった3年間の学習をかさに着て専門家気取りになり、普通高校出身者と給料が同じであることに不満を抱いたり、作業員扱いにされていることに不平を言うならば、先のような批判は甘受しなければならぬ、としている。<sup>19)</sup>

こうした、多くの問題を抱えている工業高校の教員になって、折井はどのような教育実践をおこなったのであろうか。それは、生徒に自信をもたせ、やる気を起こさせようとする教育であった。技術者は創造的な仕事をする者であるから、自分で考え自ら学ぶことを身につけるべきだという考え方である。しかし、この目標を達成することはまことに容易でない。折井にとっても、それは苦難のつづく道であった。

### 3 折井の教育実践

#### (1) 原型としての向陵精神

教職に就くにあたって、折井の理想的教育についてのイメージは、彼の青春時代を彩った一高生活にあったように思われる。それは寄宿寮と運動部にかかわる一高伝統の精神である。それはひとくちにSincerity（真摯）という言葉であらわされるものであり、一意専心や、努力・忍耐を包含する概念である。一高（向陵）精神は、寮歌に表現されているとされ、一高出身者は折にふれてそれを歌い、自らを励ましている。

折井は諏訪実業の教師だったとき、修学旅行に行く担任の級の生徒たちに、一高寮歌「黎明の籥」を教えた。<sup>20)</sup> この歌は、1914（大正3）年の第24回記念祭にあたってつくられたもので、当然擬古文体であり、諏訪実業の生徒たちにはなじめない歌詞であったろう。折井はそれを「いっしょうけんめい」教え込み、「君たちが旅先で何か困ったことがあったら、この歌を歌え。この歌を誰に教わったかと聞く人間が必ずいて、助けてくれるだろう」と言って、生徒たちを動機づけた。生徒たちは、瀬戸内海の船の上で、金比羅の山の上でそれを歌い、卒業後も折井と共に集うときは歌った。

折井が作った池田工高校歌は、「安曇の野辺に水ぬるみ 心かなしく春はきぬ」と唱い出し、折井の「口の悪い同僚が、お前のとこの校歌は、音楽的でない、寮歌調だ」と批評すれば、折井は「まさにしかり」と満悦の態である。<sup>21)</sup> 松本工高の格技室の道場開きにあたって、神主は招かず、「諸君の毎日の練習でお祓いせよ」と言い、例の鯉の詩を贈って向陵精神をつたえた。<sup>22)</sup> 「流るる水に涙して 幾度血をぞすすりけん」という猛練習とともに、フェアプレーに徹することを生徒に求めてやまなかった。

## (2) 授業とクラブの指導

さすがの折井も、授業にはかなり手こずったようである。なにしろ教員養成学校の出身ではなく、大学で教育関係の科目も履修していない。<sup>23)</sup>

岡谷工高の教師になったとき、「化学英語」という科目を担当するように求められ、英語の先生でないからと拒んだが、これは学科長がやることになっていると言われて、折井はやむなく引き受けた。<sup>24)</sup> 折井はそのあと、英語の小説を読む勉強を始め、学校の図書室にある対訳本を全部読んでやろうと志し、「イソップ」・「ろうそくの化学」・「ジキル博士とハイド」など、片っ端から速読した。その間、20年も前に買って「ツンドク」ままだったThe Life of Pasteurを取り出して読み上げた。

工業高校の定時制の3年生に、折井は化学を教えたことがある。<sup>25)</sup> それは「問題の組」で、先生と生徒の間が荒れており、引き受ける教員が誰もいなかったため、学科長の折井がやらざるを得なかったのである。授業を始めたが、「みんなあさっての方を向いて、何かを喋っても感度はゼロ」という状態に驚きつつ、「よし、むこうがそうならば、こっちもこっちだ。乗りかかった船だから、聞こうが聞まいが、授業は予定通り進める。できないものは、単位未認定、追試はしないつもり」で授業をやった。折井のこの授業態度は、決して褒めたものではない。

大学でも、私語でうるさい教室で、喋っている学生に注意するでもなく、講義ノートをマイペースで読み上げる教員がいる。前の方に座っている、せいぜい三分の一が講義を聴いているだけである。しかし、その学生たちも、後方から聞こえてくるざわめきに妨げられて、授業には身が入りにくい。こういう超然型の授業をする教員の中には、定められた時間のあいだ義務を果たせば、それで良いのだと割り切っている者が少なくない。折井の場合は、そうではなかったろう。生徒にわかるように、いっしょうけんめい誠実にやったに違いない。

このクラスについて、次のようなエピソードが記されている。ある時、時間が10分あまったので、折井はたまたま図書室で借りて読んだ新着本、『現代日本技術史概説』の内容を紹介し、技術屋になる者の必読書だと思うので読むべきだ、と勧めた。こういうクラスだから、誰も聞いている者はなかりうと思っていたところ、日曜日の日直をしていたら三人の生徒が



遊びに来て、「いろんな先生が読書のすすめをするが一般論にすぎず、読む気にはなれないが、折井先生のように話してくれれば、俺たちも読む気が起こる」と語った。このことがあってから、組の雰囲気はだんだん変わってきた、と折井は書いている。「このこと」もたしかにひとつのきっかけではあったろうが、折井の誠実な授業態度が生徒たちに影響を与えたのであろう。

折井の教え方は、手取り足取りというのではなかったようである。なにしろ、技術屋をつくるには、創造性が必要であり、自分で考える力を育てなければならない。折井は、戦前、諏訪中学の地理教員だった三沢勝衛のことに触れ、柿の隔年結果についての有名な授業について紹介し、三沢が教師であると共に研究者であり、研究によって発見したことを教えて、生徒に驚きを与え、やる気を起こさせたことを高く評価している。<sup>26)</sup>

しかし、現代の生徒を教えることは容易でない。折井は、今の生徒がテレビの歌手やオートバイのスピード、エレキの騒音に関心を示しても、学校の授業に興味を感じないことを指摘する。<sup>27)</sup> 工業高校の生徒が工業に無関心であり、できれば普通高校に行きたかったと思っている。そういう生徒にどう教えればよいか。折井は、教師自身が工業のことに常に新鮮な驚きを感じる事がその解であるとし、この答えが簡単であって容易ではないことを指摘している。

しかし、折井は三沢ばりの「考えさせる授業」に取り組んでいる。諏訪実業の教員だったとき、理科部が結成された。<sup>28)</sup> その研究テーマとして「便所の臭気」を提案し、臭気の到達距離と気温・湿度・気圧・天候との相関性を二ヶ月間調査し、結果をグラフにして発表した。生徒たちを動機づけるために、アメリカでは火災保険の勧誘状を送るとき、物が燃えるようなきな臭い匂いをふりかけ、読む人がその匂いに衝迫されてすぐ火事になるような気になり、保険に加入するといった話をしている。初めはおかしなテーマだと思い、あまりやる気なかった生徒たちも、しだいにおもしろくなり、「研究とはこんなにおもしろいものか」と思うようになった。折井は、物理・化学・生物などの各科目で、それぞれ関連のない、バラバラな知識として学んだものが、ひとつのシステムティックな知識となり、法則となることを、自らの手足と目と鼻で発見したこと、つまり科学の研究法そのものであったことが、生徒たちの興味ややる気を引き出したのだとコメントしている。

しかし、授業というのは、そんなにうまく行くものではない。折井自身、数学の授業でわかりやすく懇切丁寧に教えると、女の子から「まわりくどくて、わかんないわ」と反発され、化学では、一年の時先生から教わって嫌で嫌でたまらなかったが、三年生になって実習をやるようになったら、そう嫌でなくなったなどと卒業生に言われたことを述懐している。<sup>29)</sup>

折井のエッセイに、「研究報告・教科書の棒読みの授業について」という、まことにおもしろい作品がある。<sup>30)</sup> 昔の偉い漢学の大先生がテキストを朗読するだけで説明をせず、また

大学の先生がノートを読み上げるだけなのにヒントを得て、高校でも教科書を堂々と自信をもって読めば、教育効果が大きいという、実証的研究のスタイルで書かれた空想の報告書である。もちろん、これにはうたた寝の夢だったという落ちが付いているのだが、この文章は、新卒の教員で不得意科目ではテキストを棒読みするだけの、「教育者」ならざる「教者」（一方的授業者）に対する皮肉であり、批判である。しかし、それと同時に、いっしょうけんめい解説し、理解させようと努力しても、教科書の棒読み授業と対比して、あまり成果をあげることができない空しさをかこつ教師の苦衷を表現するものでもある。教師の側の主観的な情熱や意欲だけでは、空まわりに終わっても仕方がないが、いかなる名講義でも卓越した授業でも、さっぱり生徒の耳に届かないことがしばしばある。教師は、この空しさを克服して、頑強な実践者であらねばならない。

### （３）生徒指導のスタイル

折井は技術者である。彼の研究スタイル・教育スタイルは、共通して「実事求是」である。失敗を恐れない。失敗から学べばよい、と考える。

折井は働く青年への助言として、どんな所で働くにしても、必ず仕事の記録をとれ、と教え、殊に失敗の経験から多くのことを学び取るべきだと言う。<sup>31)</sup> 記録を取ることによって、注意深くもなり、仕事に興味が出てくる、というのである。それに関連した本も読まなければならない、こうした「働きつつ学ぶ」ことが大切だ、と教えている。

折井は、どんな困難な未知の仕事にも、新鮮な感覚で向かっていくのが「技術屋かたぎ」だ、と述べている。大学を出ても、大学時代に教えてもらわなかったような未知の問題に出くわすことが再三である。自分で勉強し、試行錯誤しなければならない。困難に直面して、逃げたら負けである。折井が重視するのは、「ヤルキトリシティ」である。<sup>32)</sup>

折井は、未知の問題に挑戦した実例として、自分自身がおこなった、裁判所からの依頼によるダイナマイト爆発関連の鑑定<sup>33)</sup>、農業高校の卒業式後１カ月間訓練所で旋盤の勉強をした若者の話<sup>34)</sup>、大学の電気科を出て冷凍機の会社に就職し、冷媒のフロン<sup>35)</sup>の化学的研究で毎日文化賞をもらった男の話<sup>35)</sup>などを書いている。彼はこうした話を生徒たちにして、彼らのやる気を引き出そうとしたのである。

ある工高で、文化祭にファイアーストームをやらせてくれと生徒が要求したけれども、火事ノイローゼの校長はそれを許さなかった。<sup>36)</sup> さかんに不平を言う生徒たちに、折井は次のように訓戒した。火事のおそれがなければ、ファイアーストームをやってもいいということなのだから、その方法を考え出すべきではないかと。そこまで言っても、生徒たちはついに何も考え出せず、「おれには二つの案がある」と述べた折井に聞きにも来ない。折井は憚然として、生徒たちは将来の日本の技術を背負って立つ技術屋の卵のはずであるが、これは

「かえらざる無精卵」ではないかと嘆いている。そして、自分の教師としての力の不足を嘆息するのである。

折井はその専門性からしても、学校や工場での安全性の問題に関心をもっている。理科の実験や学校祭での事故の多くは、科学の基本を無視したことが原因であるとして、当事者の無知を批判する。指導する教員は十分研究して生徒の指導に当たるべきだと主張している。<sup>37)</sup>

機械科でソルトバスの実習をやったとき、食塩の高温の熔融液の中に鉄棒をいきなり突っ込んだ生徒があり、見ていた生徒が火傷するという事故があった。<sup>38)</sup> 折井校長は生徒を集め、物理の基礎的法則を想起させ、新しいものをつくり出すときには常に危険が伴うことに、技術屋は注意していなければならない、と説いた。教科書で知識を注入するだけではできない事上錬磨の好機会として、偶発的事故を利用したのである。

#### 4 折井の教育観

これまでの記述で、折井の教育観にかなり触れてきた。この節は、これまで散発的に書いてきたもののまとめというより、むしろ補遺である。すでに記述したところと一部重複はするが、折井の教育観のエッセンスともいえるべきものを端的に提示したい。

まず彼は、生徒たちをガミガミ叱りつけるような威圧的なタイプの教師ではない。校長をやったあと、岡谷工高の非常勤講師時代に、ある日の授業で生徒がざわざわし、自分の話を聞こうとしないので、折井はどなりつけようと思ったが、「怒鳴るのは苦手なので」それは止め、「よし、そっちがそうならこっちもこっちだ。試験をして点数が足りなければ、絶対に単位をやらんぞと、聞こうが聞くまいが話をすすめた」という。<sup>39)</sup>

これは、折井が教員になった初めのころと同様な対応である。筆者も彼と同じような心境になったことは何度もある。怒鳴ったあとの後味の悪さは、骨身にしみている。しかし、単位はやらんぞと心中息まいていても、本当に実行すれば学生の半分から、よくて三分の一は単位が取得できなくなるだろう。そこで答案に何か拾い上げるべき長所はないかと、苦心の末に合格点を与えるようにするのである。おそらくこれは、大方の教員の苦勞するところであろう。

さて、折井が前記のような授業をしていると、真ん中の生徒が鏡を取り出し、髪に櫛を入れ始めた。折井は「止める」と言おうかと思ったが、そうはせず、授業が終わってから件の生徒と廊下でつぎのように問答した。「おい、さっき鏡出して櫛使っていたな。」「はい。」「授業中は頭の中の脳味噌の手入れするならよいが、外の髪の手入れは話がわからん。そういうことはトイレの鏡でやるもんだ。」「先生、学校の便所鏡ありません。」「馬鹿野郎、学校の便所小便いっぱいたまっているだろう。それを鏡にしてやるんだ。」

これに対して生徒は「はいっ」と「いい返事をした」という。「高校生は猛獣みたいなも

んで、扱い方が悪いとかみつ、扱い方が良いということを知く」というのが、折井の総括である。満座の中で怒鳴り上げるなどというのは、下手な扱い方であろう。それに生徒・学生は猛獣——たとえ比喩的であれ——ではない。猛獣なら、飴と鞭で制御できるだろう。人間・人格として処遇するなら、根気よく説得しかないのである。しかし、この場合の折井の説得の論理は、それほど完璧ではない。授業中は学業以外のことに気を遣うな、というのは常識であり、正論だとは思いますが、近ごろの生徒・学生は「ナガラ族」である。頭の内外を同時に手入れすることができ、さらに同時にやらなければ授業につきあっていられないのである。

生徒の「いい返事」は、折井の奇警な小便=鏡論の衝撃によるものではないだろう。折井の日ごろの授業態度、そのパーソナリティに対する基本的な信頼が、生徒の間にあったればこそであろう。これは「扱い方」という技術論のレベルの問題ではなく、教師—生徒間の基本的な人間関係に関わる問題である。

生徒に対する折井の眼差しの温かさは、彼のエッセイの至るところで読みとれる。特にできない生徒や問題の生徒に対して、そうである。そうした生徒が立派に成長したり、立ち直ったりした例がいくつか書かれており、感動的である。工業高校電気科の入試に応じた、中卒後3年を経た青年の成績がビリ(41番)で、定員は40人だった。<sup>40)</sup> 調査書には空白が多く、3つも年上では同級生に悪い影響を与えるおそれがあるという意見と、3年もたって志願した向学の精神を評価すべきだという意見とが教員間で対立したが、決定を一任された折井校長は彼の入学を認めることにした。当時は面接の制度がなかったのである。入学後、その生徒は洋服の仕立て屋に勤めていた間に、高校ぐらい出ていなければだめだとわかって志願してきたこと、また彼の弟が入れ違いに機械科を卒業していることが判明した。

入学してからは同級生とよく協調し、強歩のような学校行事にも真面目に取り組んだ。就職時、彼の年齢的なハンディキャップをカバーするために、折井は入学させた事情や在学中の様子を懇切に説明して採ってもらった。その後彼は会社からインドに派遣されるような人物になった。

折井が担任だった高校二年生が試験を欠席したので家庭訪問すると、夕刻帰って来て、つまらないから城山へ行って寝ころんで空を見ていた、と言う。<sup>41)</sup> 折井は説教してやったが、やがて転勤で彼と別れた。彼はバイト中にぐれて退学処分になった。「退学させるばかりが能じゃない」と、折井はその処置に立腹し、彼に時々手紙を送って励ました。彼はその学校の定時制で学ぶようになった。折井はやむなく退学させるような場合でも、「いつまでもお前を見ているぞ」という、母と子のスキンシップのようなものが必要だろうと述べている。

また、卒業式を翌日に控えた高校生2人がコンパでウィスキーを回し飲みしたことで、以前のことも加味されて退学処分になったという記事を読み、折井は「同じ世代の息子を持つ

ものとして、身につまされ、膚にアワを生じた」と書いている。<sup>42)</sup> この年頃の若者の背伸びの行為として、つい勧められるままに興味をもつのは有りがちなことであり、悪事と決めつけて目くじらをたてることはいかがかというのである。かつての旧制高校生なら、未成年での酒や煙草は大目に見られた。折井にはそのことが念頭にあったろう。もちろん、高校といっても、旧制と新制とではまったく違ったものであり、同じ扱いはできない。しかし、折井は若者の逸脱行動については寛容である。

折井は、高校で生徒を退学させるのは、その「伝染性」を恐れてのことであり、退学させたあとのアフターケアがほとんどなく、「厄介払い」になっていることを指摘する。<sup>43)</sup> 高校教師の多忙さからすればやむをえないこととしつつも、折井は、校長として退学させないことを基本方針とし、実際に退学させたケースはたった1回だけであった。

そうした折井でも、高校野球部の不祥事件については厳しい態度をとった。彼は県高校野球連盟の会長を勤め、「清純」なるが故に高校野球を愛した。さればこそ、野球部の選手であることが何か特権であるかのように思い、暴力を振るったり、万引きしたりする者は清純でないのだから厳しく罰すべきだ、とした。彼は優勝したチームの主力選手を、成績不良の故に落第処分にした。<sup>44)</sup> チームはガタガタになったが、彼はそれをやむなしと思っていた。

高校野球に関わった折井の結論は、「葉隠れ」の筆法で「高校野球とは負けることとみつたり」である。<sup>45)</sup> 高校野球の場合、甲子園で最後に優勝するのは一校だけであり、他の学校はすべて負ける。勝つために練習するというのが常識であろうが、それなら、敗けた場合はそれまでの練習は無意味になってしまうのだろうか。折井の言うのは、勝敗にこだわらず、ひたむきに練習に打ち込む姿勢が大切だ、ということであろう。

硬軟バランスを得た指導が大切だというのが、折井の教育方針である。N・P・S、つまり Nutrition (栄養・食)・Play (遊)・Study (勉強) が高校生の三要素であり、この三つともバランスよくこなすことによって、高校生活3年間は楽しく、充実したものになると述べている。<sup>46)</sup> 折井の教育観は、奇抜なものでも偏倚したものでもなく、良識と評すべきであろう。

目標をもたないような生徒には、ハッパをかけるより褒めてやろうというのも、教師は「教える」・「おさえる」・「育てる」・「ほめる」をバランスよくやろうというのも、折井の教育観の穏健さである。<sup>47)</sup> 鋭鋒は、それを包む袋を破ってしまう。晩年の発言として特に軟化したのではなく、彼固有の温かさが表出されている。

## 結 語

ここでとりたてて総括しなければならないほど、折井の言説は難解ではない。それは真におおらかなヒューマニズム・リベラリズムであると評しえようか。また、理科出らしい素朴・明快な思考様式だということもできようか。折井が慢性肝炎で入院中、同室の老爺が癌

ではないかとくよくよしているのに対し、折井は、人間何の病気だろうと最後は必ず死ぬのだから、癌だけを特別扱いせず、癌らしいと思ったら身辺を整理し、身内の者を安心させてがんばるべきだ、と助言した。<sup>48)</sup>

こういう爽やかさが、折井の持ち味である。一高撃剣部の先輩であり、師範であった佐々木保蔵は、後輩たちに剣の修行を通じて生死の覚悟をもつように教えたが、折井はその教えに忠実だったのであろう。<sup>49)</sup> その剛毅な性格は、武士——軍人の家風・経歴に由来するものであるか、どうか。

しかし、彼は単純明快であっても、現実社会の矛盾や世間の習慣に無知だった訳ではない。就職して上京する卒業生に、課長のところにおみやげを持っていけと母親に言われ、おべっかをつかうのは嫌だが、どうしたらよいかと助言を求められた折井は、次のように答える。<sup>50)</sup>

自分自身は、報酬を求めて人にもものを持っていったことはない。校長になったら、物を持って頼み事に来る人がおり、自分は物によって頼み事をきくつもりはないが、きくかきかないかのボーダーラインにあるときは、物によって絶対左右されない、とは断言できない。親戚の家を訪問するとき、おみやげの菓子を主客で食べて会話すると、気分が和やかになる時がある。物を持っていくことは何か形式的で気に入らないが、それによって影響されるのは社会通念であることを心得ておかないと、不利な目に会うことがある。入社のさいの手みやげは、おべっかということではなく、これからいっしょうけんめいやるというおしるしだと思って、持っていったらどうだろうか。

これは、思慮深く、誠実な助言である。考え方は硬直していない。生真面目な、生真面目すぎる性格の高校生への助言として、まことに適切な言説であると思われる。これも一種のバランス感覚というものであろう。

折井の言説・行動には無理がなく、いわば自然体である。教育は息の長い仕事であり、短兵急に攻め立てたところで、効果のあがるものではないということを、よくわきまえている。かつて折井は深志高校のホーム・ルームを見学し、生徒たちが読書について話し合っている間、教師は座って見ているだけなのに感心し、自分のクラスもそれ式にやろうとしたが、「一高自治」式のやり方はただうるさいクラスになってしまい、他の教師から指導が悪いと文句を言われた。<sup>51)</sup>

折井は言う。教師がわかる授業をしようと思っても、生徒に勉強する気がなければどうにもならない。しかし、勉強する気を起こさせることは、きわめて困難である——と。<sup>52)</sup> 陳腐な意見とはいえ、至言である。しかし、この困難を熟知しているが故に、折井は教育に過大な期待をかけない。彼に「効率 1 %」という説がある。<sup>53)</sup> 教育に100万円かけても、1万円ぐらいの成果しかなく、100人の生徒に話をしても、すべての生徒が理解する訳ではない。もちろん、折井は1%に満足していたのではなく、また怠けの口実にしたのでもない。これは、

高校長を辞するさいの、自己評価の数値なのである。

折井は校長退職時の述懐として、最近の校長生活は毎日がおもしろくないが、年に1回か2回、生徒との交流で教師をやってよかったと思うことがあったと書いている。<sup>54)</sup> 卒業生が旧師に最初は何かと手紙をよこすが、間もなく音信不通になることについて、折井も時に立腹することがあるが、教え子が成長し、自立していくことが大切で、教師というのは忘れられてよいのだ、と大悟している。もちろん、いつまでも同級会に招待してくれるような卒業生に、折井も愛着を感じてはいる。

筆者は折井のこうした教師観・教育観に親近感をおぼえる。筆者はかつて、新渡戸稲造と矢内原忠雄ら弟子たちとの精神的交流に感銘し、それを師弟愛の理想と観じたことがあった。<sup>55)</sup> そうしたモデルに捕らわれている限り、現実の学校の中によき教育関係をつくりだすことは不可能である。旧制高校的理念と新制高校的現実のはざまに立って、Romantic-Realistであった折井こそは、わが追隨すべき先達である。彼の遺訓に曰く、Nie den Mut verlieren!<sup>56)</sup>

#### 〈注〉

- 1) 折井の言説は、彼自身がファイルしたスクラップ・ブック『万興福記』3冊に収められている。また、その中から自撰して『旅愁』（近代文芸社、1985年）が刊行されている。
- 2) 「山本教授の思い出」〈『旅愁』P.106〉。
- 3) 正確な記憶ではないが、1957年の夏、「生産主義教育論」者であった宮原誠一教授に連れられて、飯田工高に折井を訪問した、と思われる。
- 4) 折井は1990年に没したが、筆者の源訪帰住はそれより2年後のことである。
- 5) 「父の思い出」〈『旅愁』PP.155～156〉。
- 6) 「繰り返すまい同じ失敗」（投書先不明、84年1月19日）。
- 7) 「『ビブロス』序」〈『旅愁』PP.52～53〉。
- 8) 「葎・桜・剣」〈同、P.198〉。
- 9) 「運動部のしごき」〈同、PP.187～188〉。
- 10) 前掲、「山本教授の思い出」〈同、PP.106～107〉。
- 11) 「夏」〈同、PP.99～101〉。
- 12) 「井伊直弼・野球・ゲリラ戦」〈同、PP.169～170〉。
- 13) 「一冊の本」〈同、PP.129～131〉。
- 14) 「青春」〈同、PP.81～82〉。
- 15) 「葉桜」〈同、PP.21～22〉。
- 16) 「ある兄弟の話」〈同、P.50〉。
- 17) 「驚きを与える教育を」〈同、P.132〉。

- 18) 「農業高校生よ自信をもて 工業高校生よしっかりせよ」〈同、P. 86〉。
- 19) 「農業高校生よ自信をもて 工業高校生よしっかりせよ」〈同、P. 88〉。
- 20) 「ある高校長の話」〈同、P. 93〉。
- 21) 「池田にて」〈同、PP. 70～71〉。本稿の表題、「胸張りで行け 面をあげよ」は、同校校歌の第三節の第5行である。
- 22) 前掲、「青春」〈同、P. 82〉。
- 23) 前掲、「高校長を去るにあたって」〈同、P. 143〉。
- 24) 「効率1%」〈同、P. 150〉。
- 25) 「現代日本技術史概説」〈同、P. 112〉。
- 26) 前掲、「驚きを与える教育を」〈同、PP. 133～134〉。なお、三沢勝衛については、宮坂広作『風土の教育力』（大明堂、1990年）。
- 27) 前掲、「驚きを与える教育を」〈同、P. 134〉。
- 28) 「臭気」〈同、PP. 19～21〉。
- 29) 前掲、「高校長を去るにあたって」〈同、PP. 143～144〉。
- 30) 同書、PP. 64～67。
- 31) 「働きつつ学ぶ」〈同、P. 137〉。
- 32) 「ヤルキトリシティ」〈同、PP. 104～105〉。
- 33) 「生物学的電子計算器」〈同、PP. 46～49〉。
- 34) 前掲、「農業高校生よ自信をもて 工業高校生よしっかりせよ」〈同、PP. 86～89〉。
- 35) 前掲、「ヤルキトリシティ」〈同、P. 105〉。
- 36) 「有精卵はかえる」〈同、PP. 61～62〉。
- 37) 「群馬での火薬爆発事故」〈同、PP. 189～190〉。「やるべき事」は必ずやれ」〈投書先不明、71年1月6日〉。「火の点検、こまめに」〈投書先不明、79年2月25日〉。「火災原因の講習会」〈『南信日々新聞』1950年?〉
- 38) 「ソルトバス」〈『旅愁』、PP. 42～43〉。
- 39) 「鏡」〈同、P. 157〉。
- 40) 「Fundamentals of Electronics」〈同、PP. 56～58〉。
- 41) 「『高校中退者』の記事を読んで」〈『南信日々新聞』83年1月24日〉。
- 42) 「教え子と私の触れ合い」〈同(?)、75年7月6日〉。
- 43) 前掲、「『高校中退者』の記事を読んで」。
- 44) 「二葉高校野球部がんばれ!」〈『南信日々新聞』87年11月22日〉。
- 45) 「負けて良い高校野球」〈投書先不明、78年8月11日〉。
- 46) 「食べ、遊び、勉強を」〈『南信日々新聞』(?) 85年4月1日〉。
- 47) 「怒るより褒めよう」〈投書先不明、88年7月4日〉。「生」〈『南信日々新聞』、88年1月25日〉。
- 48) 「痛」〈『旅愁』 PP. 159～160〉。



- 49) 「おこられる」〈同、P. 83〉。石田和外「子、孫、」1981年。
- 50) 「ある生徒とのやりとり」〈同、PP. 59～61〉。
- 51) 「わが高校教師物語」〈「中日新聞」87年11月5日〉。
- 52) 前掲、「高校長を去るにあたって」。
- 53) 「効率1%」〈「旅愁」、PP. 150～153〉。
- 54) 「教師の生きがい」〈同、PP. 181～182〉。
- 55) 宮坂広作「エリートの教育と大衆の啓蒙——新渡戸稲造の再評価」〈「山梨学院大学法学論集」42（1999年2月）〉。
- 56) 「日課念仏」〈「旅愁」、P. 167〉。

### 〈謝辞と追記〉

インタビューの依頼を快諾して率直にお話し下さった折井一氏未亡人の和子さん、「旅愁」を貸与して下さい下さった子息宏光氏に深謝する。

折井家を訪問したのは99年7月30日午後で、筆者はその前日の夕刻、幼稚園教諭免許状の認可問題で文部省に申請書を提出に行き、帰宅したのはかなり夜も遅い時刻であった。30日の夜、筆者は急に発病し、救急車で病院に運ばれる羽目になった。7月後半、文部省と「相談」するために再度上京したことを含め、校務繁多によって心身が疲労のどん底にあった。発病は、そうした無理の積み重ねの必然的な帰結であった。

8月1～2日に松本市の旧制高校記念館で開催された夏期セミナーに、無謀を承知で出席したのは、研究発表者の一人として招かれていたことへの義務感からであった。1日の夜も2日の発表中も気分が悪くなり、妻の看護でようやく事なきを得た。

辛うじて帰宅した後も、健康状態は一進一退であった。その不安定の中で、本稿は執筆された。30日のインタビューの余韻がまだ消えぬうちに、と思う気持ちと、夏期セミナーで聞いた教育史学や教育社会学の研究者たちの研究スタイルに対する懐疑や不満がバネになっての記述であった。ひとくちに言えば、それらは旧制高校の歴史的遺産から正しく学ぼうという真摯さに欠けるものと思われた。それはなにも研究者の道徳性の問題ではなく、学問研究の方法論上の特性に由来するものであり、客観的・実証的にして非主体的・傍観者的な近代的科学のディシプリンに患災だということである。「そういうお前の文章は、単なる記述と感想にすぎないではないか」という批判は、甘受しなければならないだろう。

筆者は近年、自己の直面する教育実践上の困難に対して、何らかの示唆を与えてくれる先人の実践と言説に謙虚に学ぶことに努めている。それは労多くして功の少ない難行道であるが、故人であろうと現存者であろうと、そのような先達に対して感じうる親近と憧憬が、かかる末法暗黒の世に辛うじて生をつなぎとめる力となっているのである。

先師、上原専祿先生がかつて万感の懐いで書かれた「死者との共闘」の一念を、改めて思い知りつつある。死者をして黙せしむることなかれ。死者の平安を祈ることなかれ。わが拙き声と筆ではあるが、闘い、勝利を収めずして逝った人びとを甦らせるために、わずかに残された力をふるい起こさなければならない。

